

たかだか人口十万余のプリンス・エドワード島州と、国の三分の一の人口が集めるオンタリオ州と、どうして同じレベルで考えることが出来るのだろうか。持てる州と持たざる州と、仏語系と英語系と、州の間には数えれば切りがない程の断続と格差があつて、私は気が遠くなつてしまふ。

最近の総選挙の結果は、地方分断の姿を最もすっきりと浮きぼりにした。ケベック州からは、現政権を担当する保守党の代表が一人も選ばれなかつたということ、自由党もまた西部を代表する人を全く擁していないということは異常である。真にナショナルな政党すらカナダには存在しないのである。各州が一緒にいることが、実にしんどいわけである。考えていると、厳しい現実ばかりが目について仕方がないのは、悲観的な私の性格のせいであらうか。

私のもう一つのカナダ理解は、先住の日系人とのつき合いを通して深められたと思う。私の住んでいた都市には、カナダで最大の日系人口(二万人余)が集まり、社会をつくっている。中国人やイタリヤ人の街のように目にみえる共同体があるわけではないから、その社会を知りたいと思つたら自分からさがして近づいて行かなければならない。戦時中の強制立退きで西海岸を追われた日系人は、戦後、各地で散らばつて住むようになった。排斥をさげ、同化するために「散らばる」ことはむしろ意図的に行われたのであつて、日系人は目立つことを極力避けてき

たのであつた。私にも少しづつ知り合う人が増え、親しくつき合つてくれる人も出てきて、彼らのたどつた道を聞いたり、自分で調べたりするうちに、私の頭の中で二つの考察が行われるようになった。

その一つは、日系人が懸命な闘いのあとでカナダ社会に築き上げた、「模範的少数民族」としての地位の確固たる重みである。私は日系人のことを悪く言う人にはまだ出会つたことがない。日系人の社会的評価は、貧しい移民として社会のどんで働いて、沢山の子供を立派に育てて、いま年老いていく一世たちの堅気さと清潔さがきざりつたものであり、二世の親譲りのまじめさと勤勉がささえてきたものである。私は人間的にも、彼らの時代遅れで、律気で素朴な人柄が本当に好きになつてしまつた。戦後再定住して三十年余、日系人は東部という新しい土地でも、完全に信頼できる人間として評価されている。そのことからくる恩恵を、私たちに続いたものは、有形無形に受けているのである。私たち「戦後派」が新しい土地で歳月も浅く、少数民族ながらどうやらやつていけるのも、先人の日系人に負うところ少なくない。

二番目の考察は、日系史に何を学ぶかということである。今ある状態は、日本人がこの社会で生きてきた百年の時の流れの中で解釈してこそ、はじめて意味がある。まず私たちは先人のたどつた道を客観的に正しく理解せねばならないと思ふ。日本人がどんなにひどい迫害を受けたか、私たちの先人はカナダ社会からほ

とんど放逐されたという歴史的事実が、三十年前に起こつたのである。私はまたいつか、自分たちに、あるいは他の少数民族に、同じことがふりかかってくることもあり得ると思う。少なくともそういう現実認識を持つことが、大切なのだと思ふ。そうすれば、現実にそういう事態に直面したときに、おどおどしたり、同じような痛い目に合わずにすむのではないかと

〈佳作〉

## カナダの思い出

にしはらようこ  
西原容子

(吹田市立山田第三小学校六年)

私は、三才から五才までの間、おとうさんの仕事のつごうでカナダへ行きまし。おとうさんとおかあさんと一つ年下の妹、映子と。だから英語はペラペラだつたのです。今では、もうまるつきりダメですが。

カナダの人は、日本人とちがつて外人が歩いていても平気です。そんなところはとつてもいいと思います。それにカナダは、とても美しい国なのです。

私たちの住んでいたところは、オタワのアパートです。十一階だての五階に住んでいました。とってもきれいなアパートで、日本でいえば、高級ホテルつてところですよ。でも、家の中でも、くつの上ま上がったり自転車を入れたりするので、洗たく機は家の中に置かないで、地下室にみんな置きます。洗たくするとき

思ふからである。あらゆる事態に終始一貫、現実的に対処すべきだ——これが私が日系史から学んだ教訓である。

長い間の学業を終えて、三年前に私は実社会へ出た。大学という温室から、実社会という戦場に移つて、今、私はどこかのコミュニケーションで自分のルートをつくるべく努力している。自分の間は、あたふたとした生活が続くことは確実である。

は、地下室へ行くのです。おかあさんと地下室へ行って、洗たく機の上ですわつたのをよくおぼえています。それから、アパートの人のためのプールがあつて、私たちもよくそこへ行きました。

私がカナダへ行ってはじめてできた友だち、それは、アンドリア・ミラーという女の子で、私たちが、そのアパートへ引っこしてきたと同じ時期に、ミラー家も引っこしてきたのです。同じ年だし気が合つたのか、それからはなんでもいっしょですよ。おじさんもおばさんも、弟のブライアンも、みんなやさしい人で、家族どうしも仲よくなりました。あるとき、私たちとミラー家とで、チューリップのきれいな所へピクニックに行きました。ところが、子供四人がまい子になつたそうです。そして、おとうさんたちがみつ